

微笑みの国と クーデター

塚田 和也

国民性という言葉がある。ある国の人々に共通した気質を表現するものであるが、外国人の勝手なイメージであることも少なくない。しかし、イメージは重要なので一切合切を無視するわけにもいかないだろう。最近まで二年間を

タイで過ごした経験によれば、タイの人々に日本人の国民性をたずねた場合、「勤勉」「礼儀正しい」「大人しい」といったお馴染みの返答を期待することができる。一方、タイの人々の国民性を表すものとして、日本では「微笑みの国」というキャッチフレーズが広く知られている。タイの人々の穏やかで寛容な気質をイメージさせるに十分であるが、このキャッチフレーズはタイの観光産業が長年用いてきたことで定着したといわれており、そこに戦略的な意図が存在することは否定できない。とはいえ、タイの人々もこのキャッチフレー

ズについては相応の自負を持っているようである。

タイには一三種類の異なる感情を表す笑顔があるそうで、外国人がそれらを正確に見分けることは難しい。必ずしも好意を表す笑顔ばかりではないが、日本でも「苦笑い」「ひきつった笑顔」の表現があるように、笑顔に多くの意味があることは不思議でない。面白いのは、タイの人々の笑顔が、相手との関係性や自分の立場が危うくなりそうな場面でも、しばしば大切な役割を果たすことである。よく引き合いに出される例を紹介しよう。衝突事故が起こった場合、本来は衝突された側が怒って車から飛び出してくるのが普通である。ところが、タイでは衝突した側が「心配ないですよ」と微笑みながら降りてきて、衝突された相手をなだめるといっているのである。問題を深刻にとらえず対立が決

定的になることを避けるため、いかなる状況でもお互いの笑顔を受け入れる土壌がタイにはあるのだと思う。

昨年の後半から今年にかけて、タイの政治は混乱を極めた。街頭での大規模な反政府デモや軍事クーデターによる権力の交代といった事態は、微笑みの国のイメージに似つかわしくないと感じるかもしれない。しかし、決定的な対立を避けることに重きを置く社会では、ひとたび対立が明確になると解決が難しくなることはむしろ自然である。民主主義の原則や選挙結果を否定する主張が一定の支持を集めたことには疑問も感じるが、政治的な混乱によって微笑みの国というイメージが覆されたわけではない。混乱がピークに達した時期でも、バンコクの市民生活は比較的平穏であり、反政府デモの人々も露店で買い物したり、路上でコンサートを楽しんだりするなど、一般に思い描くデモの様子とはどこか雰囲気異なるものであった。国王という権威が存在するため、深刻な対立が生じても最後は何とかなるとい予想が人々にはあったのかもしれない。

研究上の関心から農村にも何度か訪れる機会があった。農村の人々が都市の人々より親切なのは、いずこも変わらないが、そうした農村でも対立は生じうる。農地の貸借関係を調べてみると、それほど頻繁ではないが、契約期間の更新や地代支払いに関して問題が生じていることがわかった。その場合、村長がそれぞれの主張を聞いたうえで解決策を提示し、双方が受け入れるという図式が一般的となっている。農地貸借に関する法律も存在するが、村人の多くは法律を知らないし、村長による解決策も裁量の範囲でかなりケースバイケースのようである。国王と村長では天と地ほどの違いがあるとはいえず、対立が生じた場合にしかるべき立場の人に解決をゆだねるという作法はタイにおいて広く受け入れられているようである。事前のルールより第三者の仲裁に価値を見出しているといえる。そうしてみると、タイにおける政治的な混乱とその帰結は、微笑みの国ならではのという気がしてくるのである。

(つくだ かずなり／アジア経済研究所 前バンコク海外研究員)